十二月号

第二十七巻
第十二号
昭和五十五年十一月二十日印刷
昭和五十五年十二月十五日発行
昭和二十九年七月二十日
第三種郵便物認可
桃
十二月号
毎月一回十五日発行
通巻第三一九号
頒価 四〇〇円

桃
十二月号
第二十七巻第十二号

カタコトと雨戸の音の冷々と聞ゆるこの夜半病友の想はる
いつの日か山のあなたの倖せを与へ給へとブッセ読みつぐ
緑なすはこべを読めばほほ笑みて病友は昔を偲びゐるらし

袋田の滝　東京　桑　好子

この奥に見晴し台のあるらしく長き隧道を水音つたひ来
西行が四度見るべしとしるす碑を読む人人へ滝しぶきふる
滔々と袋田の滝は音高く四度の落下に淵も妙なり
おとにきく紅葉の山水集めつつ滝つ瀬となり末の久慈川
袋田の滝一二三段水落ちて四度目の白糸げにも壮観
空澄みて巌の上の滝口の白雲は水と共に落ちむとす
みあぐれば水の布引きま白にてたちまち玉の透ける簾や
常磐の冬の寒さはこよなければ氷結の滝めざましからむ
好文亭の高き殿よりみわたせば秋空のもとに千波湖のどけし

銀婚　亀岡　古田　彩子

宝ものまた一つふゆ銀婚の祝ひに賜ふ銀のブローチ
かさねたる月日は重し銀婚の朝を神にただ謝しまつる
親のなき吾に銀婚を祝ひたまふ友ありただにありがたきかな
恥しきことのみ多く夫と行く道思ひつつ眠り難けれ
勤め了へ帰り来りし部屋中にりんごの甘酢き匂ひ好まし

ときは路の旅　東京　瀧　直治

穂芒と稲架を車窓ゆ眺めつつ歌の友どちときは路を行く

喜びにをり　古田　彩子

仙人草とは、どんな花なのでせう。お歌で、白い花といふことはわかりますが。「今年も会ひ得し喜び」で、花好きな作者が、はっきりわかります。しかも「顔よせて」その喜びにひたって居られるのです。秋草の優しさを心のなぐさめとされる生活の美しさ、羨しく思ひます。

幼き孫のわが背をたたく小さき手のやはらかき音心にひびく　山川日出子

わが背をたたいてくれる幼い孫の手の音、その動作、愛情に満ちて歌はれ、特に結句の「心にひびく」で、作者の喜びがよくわかります。

病みたれば草生ひ繁る吾庭に紅葉葵の明るく咲けり　大崎波留子

御病気はもうよろしいのでせうか。紅葉葵の紅さを、明るく咲けりと詠まれてゐますので、ほっとしました。手入れもできなかった庭に、去年と同じ様に紅葉葵が紅々と咲いた情景を見られ、作者も希望に心はずみ、明るい気持になられたことでせう。

蝉時雨短き命のあはれさよ嵐の中もなほ競ひつつ　森　サダ

嵐の中もなほ競ふ蝉時雨、そこに短くつきる

袋田の隧道出でて見上ぐれば末広がりの白糸の滝
四段に姿をかへてたぎり落つる袋田の滝さても珍らし
奥久慈の清き流れに影写す淡き錦を織りなす山々
白き雲一つ浮べる空の下草紅葉の野にあきつ飛び交ふ
古の面影うつす好文亭巡りて君臣和楽を讃ふ
いたつきに加はらざりし友とまたいつかふたたび訪ね来まほし

雑詠　東京　田中　克己

わが世をばくはしく書かむ志われに起りぬしあはせのゆゑ
なでしこの群れ咲きゐたる沢地をば妻とのぼりぬゆかた着しわれ
よなかすぎ流星多く見ゆるてふ予言を聞きぬわれは眠らん
御嶽は全貌見せぬ去る我を送るがごとく秋空のもと
道造の思ひ出さそふ萱草を妻はもちたり庭に植ゑんと
あはれなり秋ふかくしてどなられて六十五歳を迎へける妻

庭　岡崎　羽根田　静枝

植ゑ替へし水仙の芽のつぎつぎと木洩れ陽浴びて日毎伸びゆく
日だまりの水仙の上にもみぢ葉が厚みとなりて色あせゆけり
隙間なく朱の山茶花咲き満ちて小春日和の庭を彩どる
丈長き茎に黄バラは蕾持ち風に大きく輪をかき揺るる
紅紫檀見れば思ほゆ空襲に瓦礫と化せる西原町を
枯枝とみゆる牡丹は赤き芽を節々に持ち冬越さむとす
網となり中を透かせる酸漿は赤く熟せる実をのぞかせて
檀の実赤くはじけて白壁に三つ四つ五つ晩秋迎ふ

蝉の命のあはれさを感じられた、よくわかる歌です。ただ「あはれさよ」と、はっきり言ひきられて、余情がなくなりました。

仲秋の望月いざよひ立ちまちも遂に見られず今宵も時雨る　窪田登久子

「望月いざよひ立ちまち」と、十五夜十六夜十七夜を、たたみ込んで歌はれ、「今宵も時雨る」を、結句にすゑてがっかりした気持を出され、共感をもって味はへる歌です。待ちのぞんでゐた月が見られず、本当に残念でした。「蕎麦の花白く小さく群がりてしぐるるなかに花びらこぼす」も、美しい歌です。しぐれの中に真白な蕎麦の花の散る様子を、蕎麦を主体にして「花びらこぼす」と歌はれたところ、たくみです。

喘ぎつつ山道登る我を待ち手をさしのぶる吾子にほほゑむ　有馬　直子

もう、幼いお子さんではないでせう。山道に登りなづむおかあさんを助けることのできる少年に成長されてゐます。その吾子のやさしさたくましさが、どんなに作者にはうれしく誇らしいか。「吾子にほほゑむ」に、その気持がよくあらはれてゐます。わかりやすく素直に詠まれ、気持の徹った歌です。

薯蔓や南瓜を入れし雑炊をたぶる日とする

小夜更のしじまの中にどんぐりのはげしき音たて屋根に落ちくる

わが秋　　岡崎　小林　あき

名を知らぬ樹の紅葉をたづぬればナンキンハゼと教へたまひぬ
落葉焚く煙の匂ふ寺庭に井戸のポンプを激しく汲む人
秋の日に野鳥の群のさへづりを聴耳たてて森へたづぬる
七五三桃割姿に手をつなぐ父は若くてにこやかな顔
雨あがり秋深まりし道にして森の中よりひよどりのなく
雨あがりバス待ちをれば山茶花の花のピンクの数々揺るる
銀杏の見事散りたる駐車場に鎌倉の旅の想ひ出めぐる

里子M子九歳　　西尾　御舘　信子

里子二人世話するは己が行と思ふねぎらひの言葉の前に面はゆし
変り者物好きとわらふ人あれど里子らの世話は己が行なるを
行なりと堪へつつも悲しけふもまた物盗りて黙す子と向ひゐて
両手にて引寄せたれど我を見ず遂に頬打ちぬわが眼を見よと
頬打ちし虚しさにどっとあふれ来しわが涙見て児も声をあぐ
頬伝ふ涙ぬぐはず盗りしこと「わからんと思った」とけふもうそぶく
もの心つきし以来の盗みなり黙し涙し身を守り来し

雲の上　　京都　隅田　君枝

飛行機に初めてのりし雲の上高天原に上りたる如し
高知なる桂ケ浜の海青く五色の石をみやげに買ひたり
黒潮の高知の宿にかつを食みわが生涯のよろこびとなる
信濃なる白根は火口に湯をたたへ奇びなる姿にしばし佇む

その上またすばらしい序文がついてゐて、歌集を自ら重くしてゐると思ひました。御出版を心からおよろこびし、その堂々たる装ひに祝福を送ります。

そしてまた清風松韻をよぶごとき数々のみ歌よみながら心沁むものを多々覚えます。机辺において、くりかへし拝誦し、ともすれば俗塵にまみれがちな自らをかへりみたいと思ひます。とりあへず御礼まで。　不一

（荒木精之氏は日本談義主宰・作家）

北川晃二氏より

謹啓すっかり御無沙汰しています。お変りないことと存じます。先日は御著「寒木瓜」をわざわざお届けいただき恐縮です。保田与重郎さんの序文は六百田さんの人柄を表わして的確で、そのりっぱさにあらためて敬意を表しています。六百田さんの歌はさすが年輪と歌心が感じられ一首一首心に刻ざまされる思いです。叙景のうたも味わい深さに魅せられますが「人生に勝たむとおもふあさましさ限りなけれや寡黙となれり」など共感を覚えるもの数多くあります。まずは御礼まで。敬具

（北川晃二氏はフクニチ新聞社長・作家）

発行所火の会呉市和庄町二―二―二六

後記

昭和五十六年辛酉の年が明けました。東京の空は美しく晴れ上り、暁には残日皎々としてオリオンの星がきらめき、やがて美しい初日の出を拝することが出来ました。が、北陸方面では大変な豪雪で、越前と背中合はせの奥美濃の郡上の白鳥町も高鷲村も。三メートルからの雪に埋れたよし、蛭ケ野の雪や、白鳥町の高校の体育館が、屋根の雪の重みでつぶれたことなど、新年早々テレビでも放映されました。郡上を貫く国道も交通が途絶したやうでした。その後も度々ニュースで岐阜県と福井県のローカル線二本が不通であると言ってゐるのは、越美南線と北線のことでした。越前と美濃とを、つまり福井岐阜間を結ぶ筈のこの鉄道は、北と南から工事を始めたまま戦時体制となり、国策の線に沿って工事は中絶し、遂に北線と南線が結ばれることがなかったのです。越美南線は、弘至のゐない婚家でくらした郡上八幡や、戦後帰農して百姓をした高鷲村へゆく為に下車する北濃の駅のあるローカル線です。北濃は工事中断の為に南線の終着駅になってゐますが、やがてこの線は赤字国鉄の犠牲になって廃止される運命にあります。

どこまでも長良川を遡ってゆくこの単線の列車は、長く貨客混合の蒸汽機関車で、車輛も短く、昔はその中央にストーブがあり、屋根の上に煙突が出てゐる姿が、アサヒグラフに出たこともあります。乗客はストーブを囲んで話の花を咲かせ、雪に濡れた外套なんかから湯気が立ってゐるのでした。幾度も幾度も辛いゆききをしましたので越美南線ときくだけで胸がしめつけられるのです。はじめて彼に会った日に彼の口から出てはじめて知った名称でもありました。雪の季節に往来したことは少いのですが、それだけに却って沿線の雪景色は瞼に凍りついてゐます。豪雪の今はどんな風景でせうか。奥深い静かな村の、舅も眠ってゐる墓所もすべて真白にしんしんと埋れてゐることでせう。伊勢湾台風以来、何度も水害では不通になった線ですが、雪害ははじめてだと思はれます。大雪のニュースはかぎりなく私の感傷を誘ひました。眼前に雪はなくとも胸底に郡上の雪を見て、ひとり雪見酒でも掬まうなどと思っただけで涙が落ちるのでした。

誰方の上にも是非とも平安な一年をと切にお祈り致します。

（山川京子）

「桃の会」規約

一、新しい浪曼精神に基き、短歌を中心として広く文学芸術を研究するを以て目的とする。
一、自由な、文人、新人交流の場とし、同人制を敷かずすべて会員によって組織する。
一、毎月歌会、研究会を催し、機関誌「桃」を発行する。
一、毎月歌十首を十日までに投稿し、詩、評論、散文などの寄稿も自由とする。
一、会費は左のごとく定める。
　入会金五百円　会費一ケ月　四百円
　（但し三ケ月分以上前納のこと）

桃　十二月号（毎月一回十五日発行）
昭和五十五年十一月二十日印刷
昭和五十五年十二月十五日発行
編集者　石田　圭介
発行者　山川　京子
東京都江東区新大橋一―八―一〇
印刷所　信和印刷工業社
東京都杉並区荻窪三―二九―一六
発行所　桃の会
振替口座東京（五）八二八二六番
電話（三九八）六五八五番
〒一六七

桃

二月号

第二十八巻
第二号
昭和五十六年一月二十日印刷
昭和五十六年二月十五日発行
昭和二十九年七月二十日
第三種郵便物認可
桃　二　月　号　毎月一回十五日発行
通巻第三二一号

幾とせをたてつ開きつ活し来て我が門家人の性も知りゐむ
泣きて出で笑ひて入りし事もありし門の戸は黙し何時もやさしき
冬ながら厚着の肌にもぬくぬくと日は透り来てただありがたし
創立より百年迎ふる我が学園命を生きて寿ぐ我も居り
新しき門の軋みの音響き新春明けぬよき年祈らむ
眉たかき御子に美しき花嫁の並みて立たすをわが忘らえず
君が家に花匂ふらむよき二人たらちねと共に住みますと聞く

法広寺　名古屋　森　サダ

法広寺風雪に耐へ羅漢像いづれも笑みて我を慰む
アララギの木曽は煙りて秋雨に宿場は濡れて寄り添ふカップル

聴聞　山口　上村　清美

寒ささへすずろにすがし新年の石段のぼれば神燈(あかり)みえくる
松翠の初雪被くしづもりにひよどりの鋭声のみが澄みくる
初咲きの寒菊一枝手折りきて朝仏前へ妻はささぐる
心重く免許取消の聴聞の刻となりたり室へい向ふ
暴走に与(くみ)せし吾子と知らずしてあはれ聴聞の母は並びぬ
十九にて前歴を重ね恥ぢぬ汝肩そびやかすときのさびしさ
梅雨いりをテレビの告げし今日の日に重き処分を若ものらに科す
河の面を水脈ゆるやかに並びゆく鴛鴦のふたつのときに啼きかふ
妻逝きてたちまち六粁を瘠せし友は服重たげに帰りゆくなり

湖北　東京　窪田　登久子

琵琶湖より吹き来る風にのせられて晩鐘の音里にひろがる

ダチ草に、作者が感じていらっしゃるのは何なのでせうか。

おほらかなさがにましけるその君の悲しき訃を聞く夕さぶしも　大崎波留子

歌がらの大きさが亡くなられた人の人がらと相まって、心に沁みる一首となりました。

落葉焚く煙の匂ふ寺庭に井戸のポンプを激しく汲む人　小林　あき

一幅の絵のやうに、情景が適確にとらえられてゐます。「ポンプを激しく汲む」で、静の中に力強い動きがあって、この歌をひきしめました。

行なりと堪へつつも悲しけふもまた物盗りて黙す子と向ひゐて　御舘　信子

一連の歌とともに、作者の御生活のありやうに心うたれました。私も何かをと念じながら、わが身にのみかまけて過ぎる日々を、恥しく思ひます。人はそれぞれの影をひきながら生きていかねばならないのでせうが、幼い子どもであれば、時には耐へられぬ場合もままあるのでせうか。心が痛みます。

高知なる桂ケ浜の海青く五色の石をみやげに買ひたり　隅田　君枝

旅のよろこびが、素直にしかも具体的によく詠まれています。

近江路の田中畠中柿あまた枝に残りて冬日のどけし
長きつり橋渡りてゆけば一ところに御社御堂と神仏おはせり
村人ら乱世にありては地の中に仏をしまひ戦火避けしとふ
渡岸寺の観音御仏ふくよかに後姿のうるはしきかな
密教の秘仏の仏具いろり辺に村人集ひてみがき居たりき
姉川の古戦場に今夕陽落ち枯草原にからす降りたり
風なけれど昨夜の雪に肌をさす冷気あびつつ谷の道ゆく
山嵐狭間の宿に燈のともり近江の旅の一日暮れむとす

冬薔薇　高松　双名　嶋

風が揉む破れ築地越しの冬薔薇見つつ愧ぢをり懶惰の日々を
わが憂さを載せてかはらけ高々と舞ひつつ屋島の谷に落ちゆく
小さき灯りともしてわれを呼びとむる易者よ淋しき女に見ゆるか
陽のぬくみたたみこみたる夜ぶとんに手足のばせば心ほぐれぬ
削り午旁水に晒して厨の灯消せば除夜の鐘の音鳴りはじめたり
ペタル踏み遠く来て摘む芹青く届けたき人等のつぎつぎ浮ぶ

顕現祭　亀岡　梅田　美枝

吾子のくれし薬を深く荷に入れて旅立ちの前を幾度もたしかむ
ものすごき音の聞え来吾が乗れる飛行機まさに地をはなるならむ
教会のミサの始まるしるしならむオルガンの音高く修道僧の歩む
祭典終りて安らふヨハネ大寺院裏庭の花蔭にリスの走る
ヨハネ寺院祭典終り浄衣たたむ衣ずれの音清々ときく
寺の尾根遥かな森に浮きて見え旅の朝窓あかず見入りぬ
雨上り佗助の葉に青蛙背の露キラリとみじろぎもせず

賀状抄

身に替へて見ればやいかに国亡び民さまよへるその哀しみに　荒木　精之
口々にはやりの平和唱ふれば安らぐものか民も国土も　仝
何をもてむくいまゐらせむ玉きはるわれのいのちが歳の瀬をこゆ　仝
慌しく過ぎきしおもひ頻りにて七十五歳のわが誕生日　板谷　健一
いや生ひに孫生れ来む男童も女童もあはれいのちいとほしく　臼田　甚五郎
わが庭のひろ葉真椿故園より移せる花ににひひかり満つ　北川原　平造
ひむがしに常に朗らにそびえゐる烏帽子が岳を支へとぞせむ　仝
明けわたる春のはじめの朝空をしづかに動く紫の雲　近藤　達夫
細し戈千足(ほこちたる)の国と誇り来し防人念(さきもりおも)ふ平和の世にも　品田　聖平
益荒男(ますらを)の武き心を見よとごと渦潮は躍る鳴門の海に　仝
あたらしき年の始めの寿ぎごとを三たび唱へむ金鶏がごと　島　正三
山をこえ海わたるとも逝きし人あふすべもな

参道

亀岡山川日出子

鮮かな紅葉の色に染む思ひ朝の参道歩むこの幸
朝の陽に紅葉かがやく神苑の真澄める空を飛行機の飛ぶ
参道の落葉ついばむ鳩一羽吾近づくに飛び立たずをり
夕拝を終へて下れる参道の木の間がくれに冴ゆる三日月
お社の散りゆく銀杏に思ほゆる幼き頃の産土の森
たらちねもはらからも亡き故郷の秋の色深き山は恋しき

大寒

名古屋　木村晁子

集ひ合ひ生け花教はる木曜日吾が楽しみの一日なりけり
水仙の黄なる色合ひ春めけど集ひし今日は大寒の入り
春来れば紫の色やさしかる諸葛菜只冬を耐へをり
一もとの黄水仙にも心動く我となりしは「桃」によるかも
この冬の寒さに割れし丸餅のかけらあぶるとストーブに寄る
赤き頬赤き鼻する子ら帰りかじかむ手にて餅をあぶりぬ
五年生下校の頃は陽かたぶき北風の中を駆けて来しらし

朝寒

亀岡大崎波留子

にひどしに伊勢の宮居に詣づれば流れも清く心洗はる
伊勢の宮山ふところの深くして松の緑に雪のかかれる
朝寒の小床に目覚め亡き夫のうた繰り返しそらんずるは楽し
吾知らぬ人に送りし恋の歌若き日の夫ただに懐しき
一人居の暮しは吾に亡き夫の歌にて歌詠む楽しさを知りし
出揃ひしあわだち草の黄の色の鮮けきかも風にゆれ居り

し国を異にし　田中克己
もろもろのくにびとこぞりめづる日のあれとぞ思ふ主のみこころぞ　仝
天霧らふ飛騨の山々夕さればはや澄みわたる溪川の音　豊島昭平
すめろぎの静かにいますおほやしま初日かがやきめでたかりけり　高橋利一郎
再びを大地ふみしめ立つべしとますらを吾れと気負ひきにけり　仝
天がける青のひといろ胸にひめ生きゆく日日をふみしむる音　鳴上善治
この国の岩戸開きの朝明けをとき高く告げよ初鶏の声　西村公晴
新春のあかとき闇にわが世とぞ時つくる声一際さゆる　野田吉夫
羽ばたきて時つくる声の雄々しさに鞭うち今年を生きむと思ふ　仝
満月は三依の山にかかりゐて四方に音立つる沢辺を照らす　原真弓

遠退きぬ

遠退きて、―さやかなるかも
日々のすがすがと　よみがえりきぬ
―かつて
とりどりの　のぞみをいだき

初明かり

岡崎松井ひさ

天地に満つる命を秘めていま東の山初明かりする
漕ぎ行きし舟あと消えて紫に島煙りゆく内海の朝
ふるさとに通ふ小道のはだら雪踏めばさくさく音きしみ鳴る
朝まだき初詣でする人々のすれ違ふとき声交し合ふ
地蔵尊衿巻のごと初雪のかかる朝をほほゑみ給ふ
冬ざれの川一筋の谷の村南天の実のたわわに赤き

父母

西尾御舘信子

老父母には軽きがよしと里子らとシャツ選ぶ手のおのづとはづむ
求めたる父母の下着を胸に抱き雪舞ふ師走の街歩み来ぬ
背にいっぱい冬陽を受けて縁先に歌詠みいませり留守居の父は
南天の老木に千両と水仙を活けしと誘ふ母に従ふ
牧水の歌碑の軸よしと耳遠き父が大声部屋にひびかふ
突然のわがおとなひを待ちしごと母は雑炊を食べ行けと言ふ
贈りたるエプロンの色の明るきをかくべつに母が喜びくれぬ

初詣で

岡崎木村美生子

われと娘と犬連れだちて詣でむとたどる河原は陽光の中

わかれ

コロラド山下より子

はろけくて言葉交せぬ母の手記に泪払ひて息はなげくらむ
逢へば泣き別れには哭く母心再び逢はむ日ありやなしやと
君が家栄えゆくらむゆく川の末海となりあふるるごとく

かずかずの　ねぎごとの
かなわぬを知れど……
多き日は……
ばけものに　憑きて　酔いしを
ばけものの　いまなつかしく
衣粧のごとく　ひるがえる
ひるがへり、耀きて ― きらきらし
衣を剥がれし裸夫の
うつろにみすぼらしかれど
― ひたすらに
冴えゆくが ― よき。

森安理文

ほの暗き　わが身より
火のいろの　春や顕ち来も
夜の果ての　鶏(くだかけ)の
のみどより　歌溢るごと

雪おほふ　ふるくにの
地の奥を　季目ざむごと

水野隆

還暦の吉日さがす初こよみ　今岡穂水
寂しさに透き徹りゆく二日かな　真鍋呉夫

山川弘至書簡

台湾一八四九六部隊　ふちがみ隊
東京都杉並区西田町一ノ七〇七　田中方　山川京子宛
昭和二〇・二・二四

一枚目なし
こちらの部隊長は必ずしも理解のない方ではないでせうが　おそらく出版は許可を出すひまがないでせう。面倒だからその方はかまはず出さうとおもひますから　どしどしそのはこびをして下さい
屏東の方は風光はきはめて美しく　今は日々晴天がつづきます　毎日この辺を自動車ではしります　近いうちに　南端恒春に出張の予定ですがすぐかへります　先日は台北に出張しましたがこちらも汽車はものすごくこみます　今は私も将校のはしくれに加はりましたが見習士官といふのは中間的な存在で未だ一人前ではありません
いろいろとかきたいことが多いのですが　何かはづかしくていつもかき出すと止めてしまひます　めんめんたる手紙がかきたいのですが
いつもあなたの夢をみます　やるせない夢です　私たちが一しよにくらしたのはどくみじかい間だったのに　おもへばずい分長く一しよになる　そして今こちらに来てゐるやうにおもへます　そんなにもふかくかぎりないものがあるのでせう
このあいだ　みなに見送られて二人でどこかへ出かける夢をみました　そんなことはほとんど実さいにもなかったので　とてもうれしくおもひましたら夢がさめました
しかし二人で一しよに居られる日がほんとうに今いちどありたいものです　二人だけでの室に　あなたのお室がどうしてこんなになつかしく恋しいのでせうか　この世で私がおとづれる只一人の女性の室であるからでせうか　あの室をよく夢にみます　それはほんとうに切ない夢です　あの室でいまいちどあなたと会ひたい　二人きりで　そして二人で心のままに泣きたいとおもひます　くだけるほど　あなたの体をだきしめたいとおもひます
こんなことをかいてわらはないで下さい
日本の神道もし大いに興るべき将来の定めあらば　私は死なぬでせう　もし私が死ぬやうであれば日本の神道は又大いに興ることないでせう　もしこのために私が必要ならば私は未だ死なぬとおもひます　生きてまだ大事業をするとおもひます　こちらに来てからはいよいよ将校としての仕事に入ったので　当分文学の勉強は断念して　任務にまい進しました
しかし今は大分調子にものって来ましたので又仕事にとりかかります　それにしても古事記と萬葉集と源氏物語がゆっくりよみたい
おくって下さい　この前出した私の　日本創世叙事詩の序文は到着したでせうか　あの本の題は　日本創世叙事詩　にすることももうご存じのことでせう　ごへんじ下さい
私の詩集は台わんでは出せません　しかし内地で出しうれば出して下さい　しかし　西川氏に跋文はかいてもらふつもりですから　一応浄書したのをおくっておいて下さい　西川氏あてに

以上　草々

後記

ひと日ふた日は晴れたれど
三日四日五日は雨に風
路のあしさにのる駒も
ふみわづらひぬ野路山路」
雪こそふらねさえかへる
あらしやいかにさむからむ
こほりこそはれこのあした
霜こそおけれこのゆふべ」
独逸の国もゆきすぎて
露西亜の境に入りにしが
さむさはいよよまさりつゝ
ふらぬ日もなし雪あられ」
さびしき里にいでたれば
こゝはいづことたづねしに
聞くもあはれやそのむかし
ほろぼされたるポーランド」

福島安正中佐をうたった落合直文の長詩「騎馬旅行」の一節である。この部分は「波蘭懐古」といふ名で曲も付けられ多くの人に親しまれた。明治二十五年、福島中佐はドイツから帰国するに際し単騎ベルリンを発し、幾度かシベリヤを往来したのちウラジオに出て翌二十六年夏帰国した。この詩は、直文がその「単騎遠征」に感動し、欽慕の情抑へがたく作詩したものである。そのころポーランドは周囲諸国によって分割され、ワルシャワを含む大部分はロシアの属国になってゐた。

しかし、当時にあっても、民族独立の願ひは脈々とポーランド国民の間に流れ続けてゐた。リデル（一八七〇～一九一八）は次のやうにうたってゐる。（工藤幸雄著『ワルシャワ物語』より引用）

この民族はお上に逆らうのが好き
押しだまって意地を張る
力にかけては自信もあるが
神の慈悲にもおすがりする
祖先を信じて暮らし
話すのも祖先の言葉なら
昔からのしきたりも守る
そこではだれでも反逆者
揺りかごの幼な子は
母親の乳から反逆を吸いとる
母親が子の耳にささやいて聞かせる
祈りの言葉さえ反逆なのだ　（以下略）

昨年夏のグダニスクの工場ストライキからポーランド国民は自由獲得のために起ち上がり、連帯の輪を広げようとしてゐる。しかしこれを喜ばないモスクワが厳然として存在し情況は極めてきびしい。リデルの歌にもあるやうに断乎ポーランド魂を貫いてほしい。

（石田圭介）

「桃の会」規約

一、新しい浪曼精神に基き、短歌を中心として広く文学芸術を研究するを以て目的とする。
一、自由な、文人、新人交流の場とし、同人制を敷かずすべて会員によって組織する。
一、毎月歌会、研究会を催し、機関誌「桃」を発行する。
一、毎月歌十首を十日までに投稿し、詩、評論、散文などの寄稿も自由とする。
一、会費は左のごとく定める。
　入会金五百円　会費一ケ月　五百円
　（但し三ケ月分以上前納のこと）

桃　二月号（毎月一回十五日発行）
昭和五十六年二月十日印刷
昭和五十六年二月十五日発行
編集者　石田圭介
発行者　山川京子
東京都江東区新大橋一—八—一〇
印刷所　信和印刷工業社
東京都杉並区荻窪三—二九—一六
発行所　桃の会
振替口座東京（五）八二八二六番
電話（三九六）六五八五番
〒一六七